［ちくほう地域研究］

『福岡県地理全誌』にみる筑前の製薬（予察）

筑豊地域研究会会員
牛嶋　英俊

一．地域史資料としての『福岡県地理全誌』

『福岡県地理全誌』は、明治四年（一八七一）七月に発足したばかりの福岡県が翌五年に陸軍省の全国地理図誌編輯にかんする指令をうけて作成した地誌である。県はこれを臼井浅夫に委嘱し、その成果は明治八年から十三年にかけて内務省に進達された（註1）。

もっとも、当時の福岡県域は旧福岡藩領を引きついだものであったから、調査対象領域は筑前一国にかぎられ、明治九年に合併した豊前・筑後域はふくまれていない。

『福岡県地理全誌』（以下『全誌』という）の内容は、町村ごとの地理的記述にはじまり、社寺古跡から戸数や職業構成・物産とその数量金額までを網羅している。また、明治の町村合併以前であるため、項目は今日の大字単位ほどの詳細なものであり、廃藩置県直後の筑前地域を知る貴重な史料となっている。原本は美濃紙の罫紙に毛筆楷書で書かれた和装本だが、近年、『福岡県史』に影印本（写真版）が収録されて、利用の便がはかられた。

『全誌』の資料的価値についてはあらためて述べるまでもないが、とりわけ作成がおなじ調査者によって短期間にほぼ同一基準で網羅的おこなわれたことによる、成果の均一性がある。もっとも、細かく見てゆくと、たとえば物産の項で甘木村の大規模な飴生産が欠落するなど、使用にあたっては他の資料との比較は欠かせない。

筆者はさきにこの史料から筑前における飴つくりを抽出したことがある（註2）。その結果、かつて飴つくりは「飴をつくる村」ともいうべき特定の集落でのみ行なわれていたことを指摘し、これが当時の交通や流通と深く関わることを論じた。

今回同じ史料によって、飴ならぬ薬つくりを考察するが、そもそも飴は食品にとどまらずそれ自身が生薬のひとつであり、飴を主原料する生薬も少なくない。飴と薬はきわめて近い位置関係の歴史がある。

二．各地域の製薬（表1）

・甘木の製薬

『全誌』から薬をつくる町村を抜粋すると、それは筑前十五郡のうち九郡四十三町と博多にかぎられ、糸島・宗像・嘉麻郡は報告に見えない。

生産金額の割合でみれば、県内の総額七千二百二十四円七〇銭のうち、夜須郡が三千五百八十五円四十七銭と突出した値を示し、これは県内生産額のほぼ半分の四十九・六％にあたる。隣接する下座郡の〇・五％（三十七円二〇銭）をくわえると、内陸部における生産額は県内の過半をしめる。

その内わけは、薬を生産する夜須郡五村のうち、八十八％以上が甘木村（朝倉市）によっている。生産額二位の三並村（筑前町）は六％にすぎないから、夜須郡の薬生産のほとんどが甘木村であった。甘木は内陸の交通の要衝にあり、江戸時代以来、裕福な商業地として栄えた町でもあった。『筑前国続風土記』（以下『続風土記』という）には「国中にて民家多き事、早良郡姪浜に次ぐところで、「諸国に通ずる要路なれは、商人多く集り交易」し、「凡博多より甘木の間、人馬の往来常にたえず」とある。福岡藩の支藩秋月領に接しながらも、甘木だけは陸の孤島のように本藩領とされていたのは、その地勢的経済的な理由による。

いずれにせよ、『全誌』によるおおまかな把握では、明治初頭の筑前の製薬は、その金額の半分を夜須郡甘木村が担い、他の九郡と地域がのこりを分担する構図にあった。

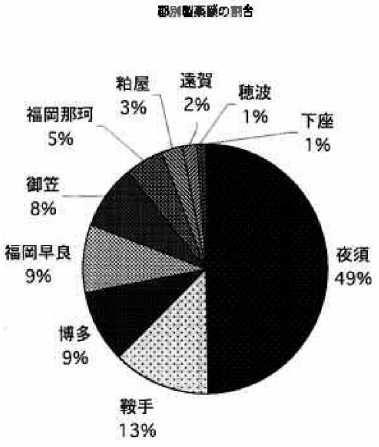

表1．郡別製薬額の割合

・遠賀川流域の製薬

甘木につぐのが九百二十八円六〇銭を生産する鞍手郡で、県内総額の十二・九％をしめる。隣接する遠賀・穂波郡を合わせると、遠賀川流域の県内生産額比率は十五・四％になる。

鞍手郡内では、薬を生産する五村一町のうち植木村が四十二％以上をしめる。さきの夜須郡ほどではないが、郡内に中心的な製薬の村があるという共通の構造がうかがわれる。鞍手郡に隣接する遠賀・穂波郡はいずれも遠賀川流域にあたり、一括して取りあげる。

三郡のなかでは県下の十二・九％を産する鞍手郡が他郡に突出し、遠賀川流域全体の八十三・四％をしめる。なかでも植木村（直方市）の生産は郡の三十六・三％と他を圧している。

植木は中世以来、水陸の交通の重要な拠点としての歴史があり、近世では対岸の木屋瀬（北九州市八幡西区）から分岐する赤間街道の宿駅でもあった。元和九年（一六二三）に福岡藩の支藩東蓮寺藩が分知された以後も植木には代官がおかれ、本藩領とされた。支藩領に接する裕福な在郷町をあえて本藩領に維持することは、さきに見た秋月藩と甘木町の関係におなじである。

植木につぐのが山部村（直方市）と直方町（直方市）で、両者をあわせると流域の生産額の三十七・九％となり、植木村をしのぐ。直方町は東蓮寺藩が分知されたとき山部村の一部をさいて成立した経緯があり、両者は歴史的にもほぼ一体にちかい町村である。

江戸時代後期の直方町は、長崎街道が町なかを通過する宿駅的な町であり、事実、町の出入り口には宿駅に特徴的な構え口が設けられていた。

図１．山内陽亭『田嶋外伝浜千鳥』
挿絵（筑紫野市歴史博物館蔵）

山部村でとりわけ生産量が多い取替子（とつけし）は『筑前国続風土記附録』（以下『附録』という）土産考に

「取替子　鞍手郡直方村（ママ）杉山玄丹と云者製す。腹病一切に用て験あり。攻撃なり。みたりに用ゆへからす」

とある。『附録』土産考の藩への献上は寛政十年（一七九八）であるから、取替子はこのころすでに製造されていた。その後、安政五年（一八五八）刊行の『田嶋外伝浜千鳥』（筑紫野市歴史博物館蔵）の挿絵に「取替子」の張り紙がみえる。これは原田宿（筑紫野市）の名物餅屋の壁にあるもので、描かれた経緯については検討が必要だが、あるいはこのあたりまで売薬人が行商していたことも考えられる。

このほか、高野村（宮若市）で二種類の薬をつくるとある武谷家は代々の医家で、元龍（立）は福岡藩の藩医をつとめた人物である。長崎でシーボルトに学び、高野長英とも交流があった。天保十二年（一八四一）には博多大浜で筑前初の屍体解剖をおこなっている。もっとも本人は幕末の嘉永五年（一八五二）に没しており、『全誌』編纂のときにはすでに故人である。

その子祐之も西洋医学を学び、日本で初めて種痘をおこなったことで知られるが、東京から出身地の高野村に戻ったのは明治十年とされる。したがって『全誌』にある製造者名は、その間の「名義」であろうか。いずれにせよ、洋学の医師として著名な武谷家だが、一方では伝統的な製薬もおこなっていたことが知られて興味ふかい。

遠賀郡では生産額の八〇％を垣生村（中間市）がしめるが、鞍手郡にくらべてその絶対額は低い。上上津役・熊手村（北九州市八幡西区）とも長崎街道上にあるが、生産量は多くない。

もっとも生産のすくない竹並村（北九州市若松区）の萬金散の生産者は徧照寺勇超とある。徧照寺（浄土真宗本願寺派）は村内の寺院であり、明治六年ころ今の名に改めたが、それまでは天照寺と称していた。『附録』竹並村天照寺の項には「住僧が小倉の小児科医桜山融庵から萬金散という妙薬を伝授され、これをつくる」旨の記事があり、萬金散は寺院が製造販売する薬であった。『附録』の上進は寛政五年（一七九三）であるから、萬金散はこれ以前から作られていたことになる。

寺院が宗教活動の一環として製薬・施薬する歴史は古く、南都西大寺の豊心丹、唐招提寺の奇効能丸などはひろく知られている。売薬行商でしら

れる越後の毒消し売りも、蒲原郡称名寺の非営利的な施薬がのちに商業化したものである。『附録』土産考は福岡安国寺の磨積円、材木町明蓮寺の保童円、東職人町大長寺の神教丸をあげており、近代以前にはひろくおこなわれていたようだ。近年の聞取りでは、筑前の寺院における施薬・製薬は糸島郡や御笠郡にも数例があるという。（註３）今後の課題としたい。

・博多・福岡の製薬

博多および福岡地域は、県内総額に対する割合がいずれも一桁台にとどまる。商業地である博多では東町が域内の四〇％強を生産し、下呉服町など他の五町をおおきく引き離している。四種類の薬の名があるが、いずれも製造者は太田榮蔵の一店である。

中島町の「万能膏」の製造者に児島善三郎の名が見える。今日洋画家として知られる児島善三郎は、博多中洲中島町の紙問屋児島本家の九代当主善一郎の長男として生まれている。善三郎の生年は明治二十六年（一八九三）年、『全誌』の編纂は明治初年であるので両者は別人だが、宝暦四年（一七五四）五月二十四日の条には目薬を商う「中嶋町善三郎」が見える（註４）。

『全誌』では旧城下町にあたる福岡地域を福岡早良・福岡那珂と表記しており、本稿でもこれにならって述べる。この一帯は博多に隣接する地域であり、一部には都市的な町村もあった。

福岡早良では生産が一つの町に集中せず、大工町と伊崎浦がそれぞれ三〇％台の併立状態にあり、この両町で郡の七〇％ちかくをしめる。

那珂郡では、生産額の九十六％ちかくを薬院町（中央区）がしめる。したがって、那珂郡の製薬とは薬院町の製薬とほとんど同義語である。同町はもと那珂川下流左岸の薬院村地内にあったが、城下町建設のとき福岡城の東に移ったという。旧地にあたる薬院村は

「むかし異国より博多に船の着し時、薬草多く渡しを、此所に薬圃をかまへて植ゑし所」（『続風土記』）とあり、名の通り古くから製薬がさかんな地であった。『全誌』にも「土産　売薬、蓮根」とある。古くから伝わる薬も多く、再生丹は御殿医津田家に伝わる薬、麝香丸は綱場町の千手孫右衛門が唐人から教わった薬であるという。（註５）

・御笠郡の製薬

早良郡につぐ生産額をしめすのは御笠郡である。原田村（筑紫野市）が三十八％強と郡内生産額の四〇％ちかくをしめ、これにつぐ山家村（筑紫野市）の二十八％強をあわせると六十七％強をこの二村が生産している。さらに十八・八％を産する下見村（筑紫野市）は原田・山家両村の間にあるから、これら隣接する三村でひろく製薬がおこなわれていたことなる。三村はいずれも近世長崎街道上にあり、原田・山家村はいわゆる「筑前六宿」の宿駅があった。

またこの地域は肥前・筑後との国境にちかく、原田宿から長崎街道を一駅たどれば肥前国田代宿（鳥栖市）である。田代宿は対馬藩飛地（一万石余）の田代領にぞくし、江戸中期ころ奇応丸を主とする売薬業が成立していた。（註６）『博多津要録』宝暦四年（一七五四）十一月の条には「田代江口気応丸売　和平次」の名が見え、このころ田代売薬の博多進出が知られる。

その後宝暦十一年には田代代官所から「壮年者売薬差止め」が、翌十二年には「郷村における売薬差止め」が通達されており、宝暦年間における売薬の盛行がうかがわれる。隣接する原田・山家の製薬が田代の影響を受けたことはじゅうぶんに考えられる。

下見村につぐ生産額をしめす宰府村（太宰府市）もまた筑前二十一宿のひとつであったから、御笠郡における製薬は宿駅における特産品という側面が指摘できる。

・糟屋郡の製薬

糟屋郡では上須恵村が七十三％をしめる。隣接する須恵村（須恵町）と内橋村（粕屋町）をあわせると、郡内の製薬はほとんどこの三村の目薬であったことになる。

ひろく知られているように、江戸時代の須恵村に高場氏、上須恵村に田原氏、内橋村には中村氏など高名な眼科医がいた。とりわけ須恵・上須恵村には西日本にかぎらず、遠くは松前箱館（北海道）・出羽・越中・越前からも患者が来訪し、長期の滞在治療をした。壱岐対馬をはじめ日本海側の島や港からの来訪が多いのは、目の不自由な患者が船旅によったためとの指摘もある。（註７）

このため眼科医の門前には農家が営む宿屋が発達し、一種の宿場町の様相を呈した。奥村玉蘭の『筑前名所図会』には「東ハ奥州、西ハ薩摩より眼療を乞ふ人当に数百千人来りて寓居す」とある。須恵村では明治四十一年の時点でも十三軒の宿屋があり、すべてが眼病人の宿と考えられている。（註８）今日、須恵町立民俗資料館はこれらを「眼療宿場」と定義している。（註９）

『全誌』に薬の製造者として名前がある田原養全・岡正節・中村昌(正)宅はいずれも眼科医である。幕末の『福岡藩慶応分限帳』には藩の眼科医として名があり、おのおの百二十石の知行地・十人扶持・三人扶持を給されている。薬の名称はたんに「目薬」とあるが、これは「正明膏」をさす。近世筑前の代表的な目薬として知られ、昭和十年代まで製造販売されていた。単位を「貝」とするのは、紅絹で包んだ練り薬を貝殻に入れて販売したことによる。

これら須恵の目薬は地元だけでなく、売薬人により各地に売りひろめられた。『附録』土産考には「広く諸国に販く」とある。上須恵村の生産量が三千貝ときわめて多いことは、彼らの商業活動の結果と思われる。

以上、町村間における製薬を生産額で比較した。目を転じて、個々の町村の総生産額にしめる製薬の割合を見ると、最大の生産額をしめす甘木村は薬以外に生蝋・蝋燭・瓦・菓子など多様な産物がある。これらをふくむ総生産額は七万一千九百五十七円余におよび、二位の博多中島町の二倍を超える。(註10) このため、甘木村の製薬金額は県下最大でありながら、総生産額の三・九五％の低率にとどまる。

その一方で、製薬依存度のたかい町村も存在する。総生産額にしめる製薬額十％以上の町村をあげれば、福岡薬院町十九・三二％を筆頭に、鞍手郡高野村十八・九二％、山部村十八・七三％、御笠郡下見村十一・〇五％、夜須郡三並村十・〇一％とつづく。ただしその内容には大きな違いがあり、福岡の薬院町は酒・醤油など千八百三十四余円と多額の生産のなかで、二〇％ちかくを製薬によっている。町名の由来通り、薬院町は特異な製薬の町であったといえる。鞍手郡山部村も、薬院町に準じる千二百十六円余の生産額の十九％近くを製薬によっている。薬院町・山部村は、生産金額と比率の両方において製薬依存度のたかい町村であったと指摘できる。

一方で、同郡高野村のように低額生産でありながら他に産物がなく、結果的に製薬割合が高い町村もあり、両者を一律に論じることはできない。

三　薬品の概観

各町村で作られた薬に、同名のものも多く見受けられる。最もひろく作られたのは山田振薬で、生産地は夜須・御笠郡を中心に八郡十七町村におよぶ。山田振薬は近世初頭の戦乱時では金創薬だったが、平時には婦人の産前産後にも用いるようになった。振薬とは薬を布袋に包み、今でいうティーパッグのように熱湯で侵出して使った。香月牛山の『婦人寿草』には「松永弾正の振り薬、此れ産前後の妙薬なり」とある。

これに次ぐのが安神(心)散で、六郡十町村で作られた。山田振薬と同系統の処方の婦人薬である。生産の中心は夜須・御笠郡だが、なかでも甘木村の葉山太郎右衛門が全体の五十三％を生産している。

ついで、黒丸子(こくがんし)が五郡八町村で作られた。黒丸子は熊胆、いわゆる「くまのい(熊の胆嚢)」を用いる薬の一種で、江戸中期に後藤艮山が熊胆を主薬に処方した。ただし市販の製剤では熊胆を減らし、センブリやオウバクを代用することもあったという。

村別では甘木村が三軒で一万三千百四十五貼を産し、山家村では一軒で六千貼を産する。ただし甘木村産の単価七厘に対し、山家村産は六厘と安い。最も高価な直方町産は八厘である。

萬能膏は四郡五町と博多中島町で作られた。これに博多下新川端町の萬能唐人膏も含めることもできる。ハマグリの貝に入れた膏薬で、あかぎれや皮膚病などの外用に用いた。この名を称する薬は多く、中国宋台代の神仙太乙膏を原方とするものと、同名でも全くことなるものもあり、内容は多様である。

肥前田代にはオランダ人から学んだと称する貝入膏薬「唐人膏」があり、博多の萬能唐人膏はこの系統のものかも知れない。萬能膏は総生産八万五千六十二貝のうち、七十九％強を博多中島町の児島善三郎が生産している。

龍脳円は二郡二町で作るのみだが、ほぼ同名の龍脳丸を加えると、三郡四町の生産となる。龍脳は東南アジアに生育する龍脳樹から採取される結晶性の顆粒で目薬に用いられたから、この名を冠する二種類の薬は目薬と考えられる。甘木村以外では植木村の生産量が多い。西唐人町の龍脳円は単位が「貝」とあり、薬の形状が他村と異なっている。

このほか、大補湯は三郡三町で作られた。名のとおり気力体力を養う薬で、生産量の八十三％以上を甘木村が生産している。生産量は多くないが、キナキナ丸という特徴的な名の薬が夜須郡三並・下秋月村、御笠郡原田村の三村でつくられていた。

キナキナはキナ（機那）の樹皮からつくられる解熱剤キニーネに由来すると考えられ、実際に解熱剤として売られた。よく似た名の「キナキナ円」が幕末の肥前田代でも作られており、西洋人やアルファベット風の文字を描く共通の薬袋を使用している。（図２）田代・原田両宿の製薬の近親性をしめす例といえよう。

(2-1) 田代宿(註６文献)　(2-2) 原田宿(筑紫野市歴史博物館蔵)

図２．田代・原田宿の薬袋

四．おわりに

以上、『福岡県地理全誌』から製薬にかんする記述を抜萃し、そこから見えてくるものを概観した。製薬地域の偏在や生産薬の内容の分析を通して、当時の社会の一端が伺えるかと思う。今回は言及できなかったが、生産された薬がどのようなかたちで各地に流通・販売されていったかなど、今後検討する問題点は多い。本稿はそのための一歩にすぎない。

註

註１．『福岡県史』近代資料編　福岡県地理全誌一～六　一九八八年

註２．牛嶋英俊『飴と飴売りの文化史』）弦書房　二〇〇九年

註３．鷺山智英氏の教示による

註４．秀村選三ほか『博多津要録』第三巻　西日本文化協会　一九七八年

註５．近藤典二『博多津要録』第二巻解説　西日本文化協会　一九七六年

註６．さいたま民俗文化研究所『田代の売薬習俗』文化庁　二〇一一年

註７．石瀧豊美「上須恵の田原眼科」『福岡県史』通史編・福岡藩 文化（上）　一九九三年

註８．『糟屋郡須恵村々是』一八七八年

註９．須恵町誌編集委員会「須恵町誌」一九八三年

註10．ただし町ごとの金額であるため、博多全体では甘木村を超える